

プラトン『エウテュデモス』におけるクリトンのアポリア

南部 正裕

1 はじめに

『エウテュデモス』306d2-4において、息子たちの、特に年頃で彼のためになる誰かを必要としているクリトブロスの教育を気に掛けるクリトンは、自らをアポリアに(ἐν ἀπορίᾳ)いると述べている。クリトンのアポリアは、次のような彼の言葉によって表現されている。

人間を教育すると称する人たちの誰かに目を向けるといつでも、私は驚いてしまう。そして私には、あなたに真実を言うと、彼らのそれぞれが、見ると、全く異様であると思われるのだ。だから私はどのようにその若者を哲学に向けたらよいのかわからないのだ。(306e3-7a2)

ここでクリトンは次の二つの信念を同時に抱いていると考えられる。すなわち、「ひとを哲学に向かわせるには、適切な教育者を見つけなければならない」という信念と、「教育者を自称する者たちが、実際には、適切な教育者ではない」という信念である。このようなクリトンへのソクラテスの助言は、次のようなものである。

したがって必要ないことはしないようにしなさい、クリトンよ。むしろ、有益な人であれ無益な人であれ、哲学を实践する人々に別れを告げて、営み自体を立派によく調べて、もし君にそれがつまらないものであると分かったなら、息子たちだけでなく、すべての人を遠ざけなさい。もし私が思っているようなものであることが分かったなら、勇気を出して、追求し練習しなさい。これは言われることだが、君自身も子供たちも。(307b6-c4)

この助言は、息子に相応しい教育者を求めているクリトンの願いに直接答えるものにはなっていない。このソクラテスの助言をこれまで多くの解釈者たちはあまり注目してこなかったが¹⁾、これがいかなる意味を持つのかは必ずしもその見かけほど明らかではないと思われる。本稿では、ソクラテスの助言が、どのようにクリトンのアポリアの原因を標的にしているのかを示そうとする。クリトンのアポリアの原因は、2節で扱う営む者と営みそのものの価値の区別を彼がし損なっていたことにあるように見えるが、しかし私たちはさらに彼の哲学そのものの理解もアポリアの原因となっていることを見る。そして、アポリアの原因としてのクリトンの哲学そのものの理解には、どのような問題が含まれているのかを、私たちは調べる。

2 営む者と営みそのものの価値の区別

クリトンのアポリアに対するソクラテスの助言のすぐに見て取れる特徴は、それが営む者と営みそのものの価値を区別することに基づいているということである。まずソクラテスは、すべての仕事において、無価値な人々が大半であり、価値ある人々が希少であると主張している。そして体育術、金儲けの術、弁論術、將軍術といったものを例として挙げ、それら自体は価値があるものの、しかし、それぞれを営む者たちの多くが、それぞれの仕事に関して、笑うべき状態であるのではないかと述べる(307a3-b1)。クリトンはすぐさまこれに同意する。ここでソクラテスが確認していることは、営む者の価値はその営みそのものの価値を必ずしも反映しているわけではないということである。そして、クリトンの躊躇いのない同意は、少なくともソクラテスが例に挙げた諸々の仕事に関しては、営む者と営みそのものの価値の区別は、容易に見て取ることの出来るようなありふれた経験的事実であることを表していると考えられる。

営む者と営みそのものの価値を区別するならば、営む者の無価値に直面したとしても、営みそのものに向かわない理由にはならないだろう。

ソクラテス：それでは、このためにすべての仕事から、君自身は逃れ、息子たちを向かわせないだろうか。

クリトン：それは正しくないね、ソクラテスよ。(307b3-5)

クリトンは、彼のアポリアを言い表したときに、二つの信念、すなわち「ひとを哲学に向かわせるには、適切な教育者を見つけなければならない」という信念と、「教育者を自称する者たちが、実際には、適切な教育者ではない」という信念を抱いていた。そして彼は、息子に適切な教育者を見つけることの不可能性を、息子を哲学に向かわせることの不可能性に結び付けていた。しかし、この結び付きは、営む者と営みそのものの価値の区別によって緩められる。ここから、クリトンのアポリアの原因は、彼が営む者と営みそのものの価値を区別出来ていなかったことにあるように見える。しかし私はそれ以上のものが含まれていると考える。

ここで次のことを考えてみよう。なぜクリトンは、体育術などのソクラテスが挙げた例に関しては、営む者と営みそのものの価値の区別を容易に把握するにも関わらず、哲学に関してはその区別をすることが出来ずにいたのだろうか、ということである。営む者と営みそのものの価値の区別に関するソクラテスの説明は、あらゆる仕事において、価値ある人々は希少であり、無価値な人々が大半だという、クリトンも即座に同意し得るようなありふれた経験的事実に基づいていた。ここで例えば、クリトンが息子のために体育術の教師を探している場合を想定してみよう。確かに、彼は体育術を営む優れた者を見つけるのに苦勞するかも知れない。しかし、そこからすぐさま体育術を営む者と体育術そのものの価値を混同するに至るかは疑わしい。この場合、単にクリトンは、やはり優れた体育術を営む者というのは希少だと思うに過ぎないのではないだろうか。

そして実際、続くソクラテスの助言は、優れた教育者は希少であるから、たとえ多くの無価値な者たちに出会ったとしても、諦めずに探し続けよといったものではない。クリトンに対するソクラテスの助言は、営む者と営みそのものの価値の区別の指摘にとどまるものではないのである。

ソクラテスの助言は、「有益な人であれ無益な人であれ」哲学を営む人々から離れるように勧めている。これは「ひとを哲学に向かわせるためには適切な教育者を見つけなければならない」という信念に基づいた、優れた教育者を探すことへのクリトンの関心を否定するものである。このような助言は、単に営む者と営みそのものの価値の区別だけからは導かれないものであると考えられる。ここでソクラテスは、哲学を

営む優れた者を探すようクリトンに勧める代わりに、クリトン自身で哲学そのものをよく調べるように勧めている。そしてソクラテスは、クリトンが哲学そのものをよく調べるならば、それが無価値なものであると彼に判明する可能性にさえ言及している。したがって、クリトンの哲学そのものの理解は、ソクラテスのものと異なるものになる可能性を持っているのである。ソクラテスの助言は、クリトンの哲学そのものの理解が、問題となり得ることを示唆しているのである。

以上より、クリトンのアポリアに対するソクラテスの助言は、単にありふれた経験的事実に基づいた営む者と営みそのものの価値の区別の指摘にとどまらないものであることが示された。そして、ソクラテスの助言は、クリトンの哲学そのものの理解をも標的にしているのである。では、なぜソクラテスはそれを問題にするのだろうか。そこにクリトンのアポリアの真の原因をソクラテスが見出しているからだということを、私たちはこれから見るだろう。

3 「哲学」の意味の混乱

クリトンの哲学そのものの理解には、どのような問題が潜んでいるのだろうか。これは、クリトンのアポリアが述べられる前、クリトンが、ソフィストの兄弟（エウテュデモスとディオニュソドロス）とソクラテスを批判する一人の男について報告する場面に現れていると思われる。この対話篇は、前日になされたソフィストの兄弟とソクラテスによる対話を、ソクラテスがクリトンに語るという基本構成を持つが、このソクラテスの語りの中で、クリトンは、いささか唐突な印象を与えるような仕方、対話篇中その名前を明かされることのない男を話に導入する。この無名の男は、ソフィストの兄弟とソクラテスの対話を聞いた後、人だかりに遮られてその対話を聞くことの出来なかったクリトンに話し掛けてきたのであった。

クリトンによると、無名の男は、自分自身を非常に知者であると思っていて、法廷向きの言論について恐るべき人物の一人であるとされる(304d5-6)。無名の男は、ソフィストの兄弟とソクラテスの対話にアイロニカルな賛辞を送った後、それをどのように思ったのかとクリトンに尋ねられると、「愚かに話して、何の意味もないことについて無価値な努力をしている人々からひとがいつも聞くようなこと」(304e3-5)だったと批判する。クリトンは「哲学は何か優美な営みです(χαριέν γέ τι πρᾶγμα ἐστίν ἡ

φιλοσοφία)と応じるが、無名の男は、その営みが無価値であることを主張し、ソフィストの兄弟と彼らに弟子入りを請うソクラテスへの批判を続ける。

ここでの無名の男の批判の主な対象は、ソクラテスよりもむしろ、ソクラテスとの対話の中でさまざまな仕方の詭弁を用いて反論したソフィストの兄弟であると考えられる。というのも、彼がソクラテスを批判する点は、ソクラテスが「何も彼らが言うことを気に掛けず、すべての発言に逆らうような人」(305a3-4)に自分の身を任せようとしたことにあるからである。無名の男のソクラテスに対する批判は副次的なものである。よって、彼の批判する「哲学」とは実はソフィストの兄弟の詭弁による反論の営みであると考えられる。これはソクラテスが考える哲学とは異なるだろう。無名の男の批判の対象はむしろ争論術とソクラテスが呼ぶものであると考えられる。対話篇の導入部で、ソクラテスはソフィストの兄弟の営みを「言論において戦うこと、そのつど言われることを、偽であれ真であれ反駁すること」(272a8-b1)であると言い、これを争論術と規定していた(272b10)。

無名の男の批判対象が、哲学というよりむしろ争論術という営みであると考えられるとき、注目すべきは、クリトンが「哲学」という語を用いて、無名の男の批判にに応じている点、および、無名の男はソフィストの兄弟とソクラテスを批判するときに、「哲学」という語を用いてはいないという点である²⁾。確かに、無名の男は、彼への応答においてクリトンが「哲学」という語を用いたことに何の異論も唱えることはない。しかし、それに続く批判においても、無名の男は「哲学」という語を用いることはなく、単に「その営み(τὸ πρᾶγμα)」という語を用いるだけである。このようなプラトンの書き方は、無名の男の批判の対象を、「哲学」と名指したのはクリトンであることを強調している。

それから無名の男は、彼の批判を次のように締めくくる。

その営み自体もその営みに携わっている人々も、つまらなく、そして馬鹿げた人々なのだ。(305a6-8)

この無名の男の言葉は、ソクラテスによる営む者と営みそのものの区別のプラトンによる伏線になっていると思われる。これに対してクリトンは、ソクラテスに次のように述べる。

私には、ソクラテスよ、この人も、またもし他に誰かが批判するとしても、その営みは正当には批判されていないと思われた。しかしながら、このような人たちと多くの人々の前で対話しようとするのは、正当に批判されていると私には思われた。(305a8-b3)

クリトンは、一方でソクラテスもまた同意するであろう「何か優美な営み」として「哲学」というものを考えつつ、他方でソフィストの兄弟たちの争論術もまた「哲学」として考えている。「哲学」という語の意味の混乱が、一方で、無名の男による「その営み」に対する批判をクリトンが不当に感じ、他方で、ソフィストの兄弟のような人たちと多くの人々の前で対話しようとするソクラテスに忠告しようとする理由を形成するのである。

クリトンは、人だかりによってソフィストの兄弟とソクラテスの対話を聞くことが出来なかった。それゆえ、彼はその場にソクラテスがいて何やら対話をしていることだけを知っていたので、対話者たちは哲学をしているのだらうと推測したと思われる。無名の男の批判に、「哲学は何か優美な営み」であると応じたのは、そのような事情があったと考えられる。しかしクリトンは、その自分の聞くことの出来なかった対話の内容をソクラテスから聞いた後も、彼が「哲学」という語をソフィストの兄弟の営みにまで適用してしまっていることに気が付くことはない。よって、クリトンの「哲学」に対する理解の問題は、そのときの事情に依存するものではない。

クリトンは「哲学」という語を、異なる二つの意味に、つまりソクラテスの言葉遣いに従えば哲学と争論術に、割り当てている。しかし、ソクラテスはクリトンのこのような語の使用に、無名の男と同様異論を唱えることはない⁹⁾。その代わりに彼は無名の男の有り様を明らかにする方向へと議論を展開していく。

ここで私たちは、異なる意味に一つの語を割り当てることを利用したソフィストたちの兄弟の詭弁を思い起こしてみよう。「学ぶこと(μανθάνειν)」という語の多義性を利用してソフィストの兄弟はクレイニアスを混乱させるが、この詭弁はすぐさまソクラテスによって解決される(277e-278c)。すなわち、ここでは「学ぶこと」の二つの異なった意味を指摘し区別するのである。この単純な解決法がしかしクリトンの「哲学」の意味の混乱の解決に用いられることはない。なぜソクラテスはクリトンの「哲学」

の意味の混乱をすぐさま指摘しないのだろうか。なぜソクラテスはその代わりに無名の男の有り様を説明することになるのだろうか。その理由は、クリトンの哲学そのものの理解の問題が、単に語の多義性への不注意に基づく以上のものであるということに関係している。4,5節において、私たちは、ソクラテスによる無名の男に関する説明を検討することで、この点を明らかにすることを試みる。

4 「哲学」批判の動機

クリトンは無名の男を法廷向きの言論について恐るべき人物の一人であるとしていたが、ソクラテスはさらにその男の営みを明確にしようとする。ソクラテスは、無名の男が、法廷で議論する人すなわち弁論家なのか、あるいは弁論家がそれによって議論するところの言論の制作者なのかをクリトンに尋ねる。クリトンは、無名の男が法廷に出向いたことは一度も無く、言論の制作者であると答える。それを聞いたソクラテスは無名の男の正体をクリトンに明かしていく。

無名の男のような者たち（言論制作者たち）を、ソクラテスは、プロディコスによる規定を用いて、彼らを「哲学者と政治家の境界にいる人(μεθόρια φιλοσόφου τε ἀνδρὸς καὶ πολιτικοῦ)」(305c7)と呼ぶ。そして、彼らはすべての人間のうちで自分たちを最も知者であると考え、また、非常に多数の者にそう思われていると考えているような人々であるとされる(305c7-9)。そしてソクラテスによれば、彼らはすべての人々から名声を獲得するために邪魔になるのが「哲学」に関わる人々と考え、知恵についての評判(δόξα)を勝ち取るために、この人々を無価値という評判に陥れようと思っているのである(305c9-d5)。なぜ「哲学」に関わる人々が言論制作者たちの知恵の評判の邪魔になるのかというと、それは個人的な議論に彼らが巻き込まれたとき、エウテュデモスの仲間たちにいつも邪魔されると彼らは思っているからである(305d5-7)。

ここでソクラテスは、あくまでクリトンの「哲学」という語の用い方を受け継いでいる。というのも、ソクラテスは無名の男が「哲学」を批判する理由として、彼のような人々とエウテュデモスの仲間たちとの対立関係に言及しているからである。

無名の男のような言論制作者たちとエウテュデモスの仲間のような争論家たちとの対立のポイントはどこにあるのだろうか。289c6-290a6における、ソクラテスとクレイニアスの言論制作術に関する議論が参考になる。そこでは、哲学が求めるべきひ

とが幸福であるための知とは何かということが問題となっている。ソクラテスは、諸技術を考察の手掛かりに用いつつ、制作されたものが何であっても、正しく使用されることがなければ有益でないという考えに基づき、制作の知と使用の知が統一されたような知を探求する。言論制作術は哲学が求めるべき知の候補として挙げられるものの、すぐにクレイニアスによって否定される。というのも、それは言論を制作する知ではあるものの、それをを用いるのは他の人たちであり、使用の知を含んでいないからである。ちょうどリュラの制作者たちがリュラを用いるすべを知らないようなものとされる。

エウテュデモスの仲間たちが言論制作者の妨害をするのは、この使用の場面であると考えられる。言論制作者は哲学と政治のそれぞれに適度にに関わり、「危険と争いの外側にいつつ、知恵を収穫している」(305e2)とと思っている。言論制作者は法廷における勝利のために言論を制作するものの、実際にそれを争う使用の場面には登場せず、またそのような使用の場面においては無能力な者として描かれているのである。よって、無名の男の「哲学」の批判の動機には、自身の使用の知の欠如に付け入る対抗者たちの評判を下げようという意図が隠されているのである。

クリトンへのソクラテスのこの応答は、無名の男が「哲学」を批判した動機に言及するものである。ソクラテスは、エウテュデモスのような争論家たちと無名の男のような言論制作者たちとの、多数の人々の評判を得ることをめぐる対立関係を描くことで、無名の男の動機を明らかにしている。しかし、先にも述べたように、ここでソクラテスによって用いられている「哲学」という語は、実際はエウテュデモスたちの争論術を意味するものとして用いられているのである。よって、この説明にはクリトンの「哲学」という語の理解を直接的に問題にする要素は表に現れていないと言えるだろう。無名の男に関するソクラテスの説明はこれで終わりではなく、まだ続きがある。

5 哲学と政治の間

クリトンに自らを全き知者とするような言論制作者たちの主張をどう思うか尋ねられたソクラテスは、彼らの主張は、「実際のところ、クリトンよ、良い見かけを真理よりも多く(εὐπρέπειαν μᾶλλον ἢ ἀλήθειαν)持っているよ」(305e5-306e1)と言い、哲

学と政治とそれらの中間にいる言論制作の価値の序列に関する抽象的な議論を展開する(306a1-306d1)。

ソクラテスは、人間であれ他の全てであれ、二つのものの中間にあり、両者に関与するものに関して次の三つの場合があると言う。

何らかの二つのものの中のものについて、

- (1) 悪いものと善いものからなるものは、一方より善く、他方より悪い。
- (2) 同じことのためではない二つの善いものからなるものは、両方よりも悪い。
- (3) 同じことのためではない二つの悪いものからなるものは、両方よりも善い。

ソクラテスによれば、無名の男のような言論制作者たちは、哲学と政治の両方に関与している者であった。よって、哲学と政治が共に別のことのために善いならば、(2)より、両方より悪いのである。ソクラテスは、言論制作者が哲学と政治の両方が悪いということも、一方が悪く他方が善いということも同意しないだろうと言う。よって(1)と(3)の可能性は排除され、結局、彼らが本当は価値の序列において三番目でありつつも一番目であることを望んでいると論じられる。

ここでのソクラテスの言葉遣いには奇妙な点がある。無名の男は、エウテュデモスのような人々を念頭におきつつ、「哲学」に関わる人々を批判しているとされた。それにも関わらず、ソクラテスは無名の男が哲学は悪いという可能性に同意しないだろうと、特に断りなしに、主張しているのである⁽⁴⁾。

ソクラテスは、「哲学」という語を異なる二つの営みに割り当てていると考えられる。そして、この語の用い方は、そのままクリトンの「哲学」という語の用い方と重なっていると考えられる。一方で、ソクラテスは、無名の男のような言論制作者とエウテュデモスの仲間のような争論家との対立関係を描くときには、「哲学」という語を「争論術」を意味するものとして用い、そして、このような意味で「哲学」を捉えることによって、クリトンはソクラテスにソフィストの兄弟のような人たちと多くの人々の前で話すことをやめるよう忠告したのである。他方で、哲学と政治とそれらの中間にいる言論制作の価値の序列を描くときには、「哲学」という語を「何か優美なもの」とクリトンが表現したところのものを意味するものとして用いているのである。

ソクラテスの「哲学」という語のこの用い方は、何を目的にしたものだろうか。「哲学」を無価値だと批判した無名の男が「哲学」を善いものだと考えているだろうというソクラテスの発言は、すぐさま見て取ることの出来る「哲学」という語の意味の混

乱を含んでいる。そして、この言葉遣いは、クリトンの「哲学」という語の使用法を踏襲したものである。ソクラテス（プラトン）はこのような間接的なやり方で、クリトン（あるいは読者）に、クリトンの「哲学」の意味の混乱を気付かせようとしていると考えられる。しかし、なぜソクラテスは直接その混乱を指摘しないのだろうか。

無名の男とエウテュデモスの仲間の対立関係の描写と、哲学と政治と中間のものものの価値の序列に関する考察は、次のような対比を描いているように思われる。すなわち、前者は人々の間での評判（δόξα）が焦点となっており、後者は評判から離れた営みそのものの価値の序列が焦点となっているということである。ソクラテスは、無名の男たちの主張は、「実際のところ、クリトンよ、良い見かけを真理よりも多く（εὐπρέπειαν μᾶλλον ἢ ἀλήθειαν）持っているよ」（305e5-306e1）と言っていた。ソクラテスは、クリトンによる「哲学」という語の使用法を踏襲しつつ、多くの人々の間での評判による見せかけの価値と、営みそのものの真の価値との対比を描こうとしていると思われる。

よって、クリトンの「哲学」の意味の混乱は、単に二つの異なる営みにその語を割り当てているという問題以上のものが含まれている⁽⁵⁾。クリトンの問題は、多くの人々の間での評判による見せかけの価値と、営みそのものの真の価値の両者を混同している点にあると考えられる。ソクラテスが、直接語の意味の混乱を指摘しないのは、彼がクリトン（あるいは読者）に望んでいることが、「哲学」という語の意味に注意することではなく、多くの人々の評判によって曇らされた自らの哲学そのものの理解を反省することだからだと考えられる。

このように解釈するとき、私たちはこの対話篇の冒頭に象徴的な意味を見出すことが出来るかも知れない。Burnyeat は彼の有名な講演論文において、いくつかのプラトン対話篇を取り上げ（『エウテュデモス』は扱われていない）、その冒頭の言葉がそれぞれの対話篇の主題をどのようにして暗示しているのかを鮮やかに示した⁽⁶⁾。『エウテュデモス』は次のようなクリトンの言葉で始まる。

誰であったか、ソクラテスよ、昨日あなたがリュケイオンにおいて対話していた人物は。たくさんの群衆があなたたちを囲んでいて、私は聞きたいと望んで近付いたのだが、何もはっきりと聞くことは出来なかったのだ。（271a1-3）

「誰」というクリトンの問いは、息子に適切な教育者は誰かを探し求めるクリトンに

相応しい問いである。しかし、私たちが見たように、「誰」へのクリトンの関心はソクラテスによって否定され、クリトンは営みそのものを調べるよう促されるのである。なぜなら「哲学」に関わるソクラテスとソフィストの兄弟の周りには、「評判」を形成する群衆が取り囲んでいるため、クリトンは真の哲学はどのようなものなのかをはっきりと聞き取ることが出来ないからである。

6 クリトンのアポリアとソクラテスのアポリア

クリトンのアポリアの原因は、単に営む人と営みそのものの価値の区別をしなかったことだけにあるのではないと私たちは考えた。クリトンの「哲学」という語の理解は混乱しており、彼は多くの人々の前で行うべきでない争論術と、何か優美なものとしての哲学との両方をその語に割り当てていた。ソクラテスの応答は、「哲学」という語の使用の混乱を直接指摘するものではなく、「哲学」を批判した無名の男の有り様を説明することを通じて、クリトンの「哲学」の意味の混乱の理由として彼が評判による見せかけの価値と営みそのものの真の価値の区別をし損ねているという点を示唆していると考えられた。

私たちは「哲学」をめぐる多くの人々の評判が、その営みそのものを理解することを妨げると解釈した。しかしなぜ「哲学」という営みにおいてそのようなことが生じるのだろうか。

291b-293a における「王の技術」に関する考察が手掛かりになると思われる。ソクラテスはクレイニアスと哲学の求めるべき知は何であるかを探求していた。その探求の最後で彼らは「王の技術」に辿り着き、それを考察する中でアポリアに陥った。「王の技術」と名付けられたこの知は「政治術」であるとされるが、しかし、どのような点で人々を善くするのかを明らかに出来なかったために、彼らはアポリアに陥るのだった。このアポリアは二つのことが示唆されていると思われる。第一に、哲学の求めるべき知の候補として挙げられたさまざまな知とは異なり、哲学はその成果を特定することが困難であるということ。そして第二に、哲学はある種の政治の知と重なり合うものであるということである。

ソクラテスが哲学と政治とそれらの中間のものものの価値の序列を論じる際、それらが「それぞれ別のために」善いならば、両者よりも中間のものは悪いとしている。この

「それぞれ別のために」という留保は、哲学と政治が真に善いものであるとするならば、いかなる成果を生み出すのかという点でアポリアに陥ったために、この対話篇におけるソクラテスにとってもそれらの成果が謎めいていたものであるということを示していると思われる。

哲学がとりわけ多くの人々の評判によって、その真の姿を把握することが阻害される理由は、哲学そのものの成果が、他の技術知と異なり、すべての人にとって曖昧だからであると考えられる。そのとき、言論製作者と争論家との対立関係で示されたように、人々は「哲学」の価値を議論による勝利を基準にして測ることになるだろう。クリトンのアポリアはソクラテスのアポリアに繋がっており、哲学そのものの持つその成果を特定することが出来ないという特性が両者のアポリアの真の原因となっていると考えられる。Sermamoglou-Soulmaidi は、クリトンがまず争論術と哲学を区別した上で、適切な教育者を探すべきであると結論付けているが⁷⁾、この対話篇で示唆された哲学の独自性は、適切な教育者を探すことへの関心そのものも問題とするもののように思われる。ソクラテスの助言の最後で、クリトン自身も子どもたちも哲学に励むよう勧められていることは、息子のためにクリトンが単に適切な教師を探せばよいわけではないことを表している。このように考えるとき、ソクラテスの助言は、クリトン（あるいは読者）に哲学と教育が独自の関係を持つ可能性までも示唆していると思われる。

しかし、哲学そのものに関してより明確なことは、プラトンにおける哲学と政治の関係性を詳しく調べなければならず、それは手掛かりの少ない『エウテュデモス』だけでは難しい。『国家』『政治家』などの対話篇を参照する必要があると思われる。今後の課題としたい。

註

- (1) 『エウテュデモス』において、解釈者たち注目を集めて来たのは、ソクラテスのプロトレプティコス・ロゴスの場面である。この議論は、プラトンにおける知と幸福の関係を調べるための貴重な資料である。これに比して、構成上ソクラテスの語りを囲んでいるソクラテスとクリトンの対話の場面は、比較的等閑視される

- 傾向にあった。しかし例えば Kato は、ソクラテスとクリトンの対話の場面の重要性を強調している。Kato (2000), p. 124.
- (2) Cf. Sermamoglou-Soulmaidi (2014), p. 140.
- (3) Cf. Sermamoglou-Soulmaidi (2014), p. 142.
- (4) Sprague は、ソクラテスがここで、言論製作者が頭の中で善い哲学と（ソフィストたちの）悪い哲学をいくらか区別していなければならないという事実を持ち出すことを試みていると解釈しているが、私はここで重要なのは、ソクラテスの「哲学」に関する言葉遣いがクリトンと重なることをプラトンが示そうとしている点であり、言論制作者の「哲学」に対する考え自体はあまり重要でないと考える。Sprague (1962), p. 32.
- (5) Sermamoglou-Soulmaidi は、同じの点を指摘をしている。ただし、なぜクリトンがそのような状態にあるかは十分に説明されていないように思われる。Sermamoglou-Soulmaidi (2014), p.152.
- (6) Burnyeat (1997).
- (7) Sermamoglou-Soulmaidi (2014), p.152.

参考文献

- M. F. Burnyeat, 1997, “First Words: A Valedictory Lecture”, *Proceedings of the Cambridge Philological Society* 43, 1–20.
- S. Kato, 2000, “The Crito-Socrates Scenes in the *Euthydemus*”, *Plato: Euthydemus, Lysis, Charmides*, edited by Robinson and Brisson, 123-32.
- G. Sermamoglou-Soulmaidi, 2014, *Playful Philosophy and Serious Sophistry: A Reading of Plato’s Euthydemus*, de Gruyter.
- R. K. Sprague, 1962, *Plato’s Use of Fallacy: A Study of the Euthydemus and Some Other Dialogues*, Routledge.
- 朴一功訳, 2014, 『エウテュデモス／クレイトボン』(西洋古典叢書), 京都大学学術出版会。(訳出にあたって、参照した。)